

- ・（ところが）私の住むこの町は静かで奥ゆかしく自慢するに足る場所と言える。
- ・秋の雨が庭を濡らすと、まるで潮のひいた潟のような風情をかもし出し、
- ・夕もやが私の住み家を包み込む時は、まるで隠士の暮らす谷あいのような風情である。
- ・（このような住み家にいて）今の私は楚の威王から宰相の招きにも応じず漆園しつえんの役人にとどまったあの荘子の生き方に思いを馳せ、

・（一方）どこにいてもこの世のすべては空であると説いた釈迦の教えに身を置こうと誓う。

・病氣のわが身は、あかぎの木で作った古い杖に身をゆだね、

・愁いを忘れて私は、霜にそこなわれて咲き残った菊の花を詠じている。

・私の食べ物、官吏としての俸給で支えられ、その恩は、はかり知れない。

・私の衣服は寒風が吹くと身にこたえる粗末なものだけれど、今の私の身では致しかたのないものである。

（人にはそれぞれの分際があるもので衣服が与えられているだけでも有難い）

・自分のつらい身の上をしばし忘れて、ひたすらにこのように気持ちを切り替えると

・私のこの住まいは、長沙に流されていた時の賈誼かぎの家より優まさっているように思える。

語釈

この稿においては、紙頁が限られている為、調査語句の意は、簡潔な説明にとどめ、その語の出典の考察、類似的表現の見える文献等の引用は最小限に絞って頁を進める。

○官舎：官で建てて官吏に与える住宅。『漢語大詞典』では「官吏的住宅」と説明する。ここは太宰府右郭十一